**宇豆柱**

博物館の中央ロビーには、かつて13世紀の出雲大社の本殿を支えていた2本の巨大な木柱の遺跡が展示されています。この柱は、2000年から1年間にわたって行われた発掘調査で、大社の八足門（本殿の入り口）の近くで発見されました。現代の本殿と同じように、歴史的な本殿、9本の柱を3×3に組まれた構造になっていました。発掘調査では、9本の柱のうち、中央の「心御柱」、正面の「宇豆柱」、南東側の「側柱」の3本の遺構が見つかりました。他の6本の柱の遺構は、現在の本殿を囲む柵の下に埋まっている可能性があります。

10世紀の子供向けの教科書には、出雲大社の本殿はかつて日本一高い建物で、48メートルの高さだったと記されています。しかし、この巨大な柱が発見されるまで、その主張を裏付ける物的証拠は限られていました。この柱は、3本の杉の丸太を金属製のバンドで束ねたもので、直径3メートルの一本の柱になっています。柱の大きさや発見された場所は、13世紀から16世紀にかけて作成された「金輪御造営差図」に記されているものと類似しています。さらに放射性炭素による年代測定の結果、1248年の神殿の造営時に設置された可能性が高いことが明らかになりました。

この柱の保存状態には目を見張るものがあります。発掘調査の結果、過去のある時点で、本殿の近くで2つの小川が合流していたことが分かりました。木材が水に浸かったことで、腐敗の進行を遅らせることができました。

展示品には、宇豆柱の実物と、心御柱の実物大の複製品（実物は出雲大社の宝物殿に展示されています）が含まれています。側柱は元の場所に埋め戻されました。